

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00099

研究課題名(和文) 古代末期地中海世界の教養文化における宗教像と宗教史像の思想史

研究課題名(英文) Religions and Intellectual History of Religions in the Late Antique
Mediterranean World

研究代表者

高久 恭子(中西恭子)(Takaku Nakanishi, Kyoko)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・研究員

研究者番号：90626590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究プロジェクトでは、プロティノスから偽ディオニシオス・ホ・アレバギテースに至る古代末期の新プラトン主義者と同時代のキリスト教著作家たちの論考にみられる「過去の父祖たちの宗教」としての「ヘレニズム・ローマ宗教」への関心のありかたと、それに対置される宗教史・宗教現象への共通の関心としての来るべき宗教像を明らかにすることである。ここでは、たとえばアウグスティヌス『神の国』にみられるようなキリスト教側のヘレニズム・ローマ宗教像やキリスト教の外側にある哲学像への批判と、新プラトン主義者から見た神々と人間の互恵的な関係にもとづく「父祖たちの宗教」とその究極の形態としての神働術への論争を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ローマ帝国のキリスト教保護政策下において、在来の多神教を前提とする宗教や思想の姿が宗教的帰属を超えて改めて反省と考察の対象とされると同時に、キリスト教指導者によって生活規範が当時の偏見と実験的対応含みで形成される過程を明らかにし、それらの後世における受容の過程を明らかにすることで、古代末期地中海世界宗教史の動態研究とその受容史研究に新たな視角を提供し、現代における古典の濫用に警鐘を鳴らす契機をもたらすことができる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project is to clarify how the Neoplatonist philosophers from Plotinus to Pseudo-Dionysius Areopagite and Christian authors in the late antiquity understood the characteristics of the Helleno-Roman religions including magic and theurgy as 'the ancestral religions in the past', and how they envisaged the desirable form and substance of the faith of forthcoming era. Here I analysed characteristics of Christian criticism on Greek and Roman religion and philosophers who explored their philosophical thought outside of Christianity, as seen in Augustine, The City of God, and Neoplatonist controversial view on efficacy of reciprocal relationship of ancestral deity and theurgy as its integral state.

研究分野：思想史

キーワード：新プラトン主義 古代ローマ宗教史 古代末期地中海世界 初期キリスト教 西洋古典受容史 生きられた宗教 インテレクチュアル・ヒストリー 学知と宗教知

1. 研究開始当初の背景

前科学研究費研究プロジェクト「『背教者』ユリアヌス像の形成とその受容」(基盤研究 C、15K02071、2015-2017 年度)において、科学研究費助成事業公開促進費(学術図書、2016 年度、16HP5022)の助成を受け、単著『ユリアヌスの信仰世界 万華鏡のなかの哲人皇帝』(慶應義塾大学出版会、2016 年)を上梓した。コンスタンティヌス一世の甥として生まれ、イアンブリコス派新プラトン主義の思想を「ギリシアとローマの宗教の復興」に援用しようとした紀元後 4 世紀のローマ皇帝ユリアヌスの思考と宗教政策にみる宗教実践の過程を、現存するユリアヌス自身の著作の分析に即して明らかにした。

3 世紀以後の新プラトン主義者たちは神的存在と人間の関係をめぐる思索を残した。在来の宗教儀礼によらずとも観想によって神的存在と人間の関係への認識を深めるべきだとするプロティノス(204/5-270)とその弟子ポルピュリオス(234?-305?)の思考への反論として、ポルピュリオスの弟子イアンブリコス(242-325 頃)は『エジプト人の秘儀について』(Iamblichus, *De Mysteriis*, translated with an introduction and notes by Emma C. Clarke, John M. Dillon, and Jackson P. Hershbell, Leiden, Brill, 2004)において、神々と人間の交流の手段としての宗教儀礼を肯定し、訓練を受けた者向けには秘儀に通じる霊的技法としての神働術(テウルギア)の開示の道を示した。

ユリアヌスは 350 年代前半の学問遍歴期に小アジアの新プラトン主義者らに接して、イアンブリコス派の宗教論を知る。イアンブリコスの思想は 4 世紀中葉の新プラトン主義者のあいだでは賛否が分かれた。多様な宗教的出自をもつ学徒の参入を拒む側面があったからである。ユリアヌスの著作にはキリスト教への疑義とそのカウンターとしての帝国の諸宗教の肯定と再定義が散見され、政治の場に立つ学識ある帝室成員の見た「ローマ帝国の諸宗教」の姿を伝える。しかし、コンスタンティヌス一世以後のキリスト教保護政策の定着の過程にあって日々の生活のなかの宗教の現状を受け容れて「在来の宗教」の再定義と回復を強く求めない社会の要請を読み切れず、実施にあたってはコンスタンティヌス二世のアレイオス派保護策同様に反対者への強権的な措置も厭わないユリアヌスの政策は支持されなかった。しかし、ローマ帝国のキリスト教正統主義保護政策がさらに強まるテオドシウス朝期に至って、イアンブリコス派新プラトン主義は、キリスト教の外側にある哲学者たちにとって過去の宗教を回顧する手立てとなった。

キリスト教保護政策を放棄した君主に対するキリスト教指導者からの批判は必然であろう。しかし、宗教的帰属を問わず、「古来の宗教」の振興を志した学識ある君主を記憶しておこうとした文人や歴史家も存在した。古代末期のキリスト教作家が「古来の宗教」を乗り越えるべきものとしてとらえ、聖書時代史と世俗史と教会史を結ぶ歴史像を築こうとしていた時代に、同時代の哲学者たちはどのように「古来の宗教」をとらえていたのだろうか。本研究プロジェクト「古代末期地中海世界の教養文化における宗教像と宗教史像の思想史」は、このような問いに発する。

2. 研究の目的

前研究プロジェクトでのユリアヌス研究からさらに視野を広げ、後期ローマ帝国におけるキリスト教保護政策のもとでのキリスト教指導者、キリスト教の外にある伝統に立つ思想家・宗教者のみならず「ローマ宗教史」と「教会史」の形成過程とその特徴を扱い、後世におけるローマ宗教史像と初期キリスト教像の着想源としての姿を精査する。そのさい、プロティノスから 6 世紀のダマスキオスに至る新プラトン主義者の論考にみられる「過去の宗教」の営みや宗教現象への言及をキリスト教系宗教史叙述の特徴と比較し、古代末期地中海世界の宗教論・宗教史像の形成過程を明らかにする。当初の計画では

(1) ユリアヌスの作品群のほか、プロティノスから偽ディオニュシオス・ホ・アレオパギテースに至る新プラトン主義者の宗教論の翻訳

(2) ジェンダー史の視角によるキリスト教における教団内在的な行動規範の形成過程の検討

(3) 初期キリスト教詩歌における古典受容の過程についての概観の描出

も意図していた。この作業によって、古代末期地中海世界の文人たちの宗教観と生活世界の変容をより多角的に検討することができると思ったからである。しかし、これらの課題は 3 年で完結する個人研究では扱うには大きすぎることが判明した。

3. 研究の方法

(1) プロティノスから偽ディオニュシオス・ホ・アレオパギテースに至る新プラトン主義者の著作における宗教史観・宗教現象観にかんする叙述を抽出し、キリスト教作家の場合と比較しつつ事例集を作成する。

(2) 古代末期地中海世界における「哲学者と宗教観」「歴史叙述のなかの「ギリシア人・ローマ人の宗教」に関連する研究動向を明らかにする。海外渡航が可能であれば、海外研究機関での文献蒐集・文献調査を定期的に行う。

(3) 宗教研究上の理論との接合をはかる。Meredith Maguire らが提唱した、宗教現象を構成する諸要素のつながりと相互媒介関係に着眼する「生きられた宗教(Lived Religion)」理論によ

って、古代末期の諸宗教の生活世界の変容と、作家たちの記述の原理を説明する (Meredith Maguire, *Lived Religion: Faith and Practice in Everyday Life*, Oxford, Oxford University Press, 2008)。キリスト教以前のローマ宗教を論じた著作では、たとえば「生きられた古代宗教」理論を提唱するイェルク・リュプケの主著『パンテオン』(Jörg Rüpke, *Pantheon: A New History of Roman Religion*, translated by David M. B. Richardson, Princeton, Princeton University Press, 2018)は、先史時代からローマ帝国によるキリスト教保護政策導入直前までのローマ宗教史を、宗教現象の構成要素との相互媒介関係を通して観察し、変容の過程として記述する。このような方法論を宗教史叙述や宗教現象に対する作家たちの関心の変化とその背景の観察にも適用することで、古代末期地中海世界における宗教の生活誌も明らかにすることができるだろう。

4. 研究成果

(1) 在外文献調査

2018年10月末から11月初旬と2019年11月の2回にわたって、ロンドン大学先端研究所内古典学研究所図書館およびウォーバーク研究所図書館で「古代末期の詩人と「古典」の引証」「古代末期の新プラトン主義者における「宗教哲学」「古代末期の宗教の多元性」「ジェンダー・スタディーズ視点での古代末期宗教史研究」の研究動向を調査した結果、紀元後3-6世紀の諸宗教の文脈における宗教知識獲得の場の実相と教育論・儀礼論(特に聖歌論・詩篇唱の実践)における先行文化との接触の実相や、「ローマ帝国のキリスト教化」の過程での「異教」「一神教」などの宗教概念の形成過程についても検討と紹介を行う必要があることが判明した。

(2) 2018年度

研究プロジェクトの初年度にあたり、文献調査を行って今後の研究の方針を立て、口頭発表を通して問題関心の共有をはかることを心がけた。また、科学研究費プロジェクト「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴグ資料に基づく一神教の宗教史再構築」(基盤研究A、研究代表者:市川裕、17H01640)で研究分担者として調査していた「2世紀以降のローマ帝国における多宗教の共存と「一神教」的思考」研究とも両立するテーマから着手する必要が生じた。

5月に行われた日本ユダヤ学会シンポジウム(学習院女子大学)では、シンポジストとして報告「ローマ帝国の『キリスト教化』とユダヤ教」を行った。法典資料を用いて4世紀から5世紀にかけてのローマ帝国の対ユダヤ教政策の実態を紹介し、テオドシウス朝以後のキリスト教保護政策下において、キリスト正統主義教以外の宗教、特にユダヤ教に対して状況に応じて濃淡はあるが排他的な態度が強まる傾向にあったことを指摘した。

日本宗教学会第77回学術大会での「古代末期の新プラトン主義思想における宗教表象と宗教史の回顧」(9月、大谷大学)、同志社大学CISMOR研究会での「古代末期における『神話』の回顧と一神教文化」(12月、同志社大学)、ギリシア・アラブ・ラテン哲学会での「異教的一神教とは何か」(2019年3月、早稲田大学)の各報告では、ユダヤ教・キリスト教の外部にある「一神教」的实践に注目する「異教的一神教」(Pagan Monotheism)にかんする研究動向に加え、キリスト教作家による多神教系神話叙述の道徳的読解実践の事例を紹介した。4世紀のキリスト教で男性宗教指導者が行ってきた女性信徒の育成をめぐる規範形成的言説にかんしては、科学研究費プロジェクト「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴグ資料に基づく一神教の宗教史再構築」シンポジウム「宗教的实践知の獲得・伝授と教育」での報告「古代末期の宗教的实践知としての修徳思想 キリスト教と女性の場合」で紹介した。

古典受容史関連の業績としては、『ユリイカ』(青土社)編集部からの依頼を受けて同誌5月号「特集 アーシュラ・K・ル=グウィンの世界 1929-2018」に寄稿した「アーシュラ・K・ル=グウィンと文藝共和国の夢 「西のはての年代記」三部作と『ラウィーニア』の場合」で、米国の作家アーシュラ・K・ル=グウィンの最晩年の作品における古代ローマ像とウェルギリウス『アエネイス』受容について論じた。また、慶應義塾大学文学部連続講義「地中海の魅力」(6月)では、古代ローマ宗教像とその現代的受容と「古典の濫用」をめぐる課題を概観し、カウンターテナー研究会(12月)での招待講演「『古代末期』の教会で『歌った』のは誰か?」では4世紀から5世紀のキリスト教聖歌作家の生態を紹介し、ヒロ・ヒライ編『ルネサンス・バロックのブックガイド』(工作舎、2019年)にL. D. レイノルズ、N. G. ウィルソン『古典の継承者たち ギリシア語・ラテン語テキストの伝承史にみる文化史』(西村賀子・吉武純夫訳、国文社、国文社、1996年)とS. K. ヘニングガーJr.『天球の音楽 ピュタゴラス宇宙論とルネサンス詩学』(山田耕士・吉村正和・正岡和恵・西垣学訳、平凡社、1990年)の紹介文を寄稿した。

(3) 2019年度

2019年5月には科学研究費プロジェクト「アリストテレス論理学の再定位を通じた新たな自然主義的倫理学の構想」(基盤研究B、研究代表者:近藤智彦、17H02257)および「日本関係の近世ラテン語文学 成立の文脈と未校訂写本の研究」(基盤研究C、研究代表者:渡邊顕彦、19K00503)と本プロジェクトの協力事業としてワークショップ「日本における西洋古典受容」(慶應義塾大学日吉キャンパス)を開催し、報告「日本語近現代詩における世界文学としての西洋古典受容」を行い、主に西脇順三郎の論考と作品における西洋古典と民族学への言及の事例を紹介した。2021年度から研究分担者として参加した科学研究費プロジェクト「日本における西洋古

典受容に関する包括的・学際的な国際共同研究（基盤研究B、研究代表者：中谷彩一郎、21H00517）につながる企画である。

科学研究費プロジェクト「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴグ資料に基づく一神教史の宗教史再構築」ではイェルク・リュブケ教授の招聘に携わり、9月には日本宗教学会第78回学術大会第一部会パネル「Lived Ancient Religion」（帝京科学大学）とシンポジウム「生きられた古代宗教」（東京大学）を企画し、「生きられた古代宗教」の初期キリスト教思想史研究への援用について、主にアウグスティヌス『神の国』の多神教観の典拠の事例を中心に本研究課題での成果も生かして知見を提供した。

4世紀から5世紀の宗教文化についてはまず、2018年5月の日本ユダヤ学会でのシンポジウム報告をもとに論考「ローマ帝国の「キリスト教化」とユダヤ教 コンスタンティヌス朝からテオドシウス朝まで」を『ユダヤ・イスラエル研究』33号（2019年12月）に寄稿したほか、論考「アウグスティヌス『神の国』における「地上の国の宗教」」を勝又悦子・柴田大輔・志田雅宏・高井啓介編『一神教世界のなかのユダヤ教』（リトン、2020年2月）に寄稿した。アウグスティヌスはキリスト教擁護の立場から在来の多神教系諸宗教への反論を行うさい、司牧の現場で接する同時代の現象ではなく、典拠として確立された「古典」としての共和政期（古物考証家の著作やキケローの宗教論）にみられる事例への反論を企て、「哲学」への反論にあたってアプレイウスやポルピュリオスを仮想敵とした。アウグスティヌスのユダヤ教への態度については機会を改めて論じる予定である。さらに『ユリアヌスの信仰世界』での成果をもとに、コラム「ユリアヌスの「生きられた哲学」」を伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編『世界哲学史2 古代2 世界哲学の成立と展開』（ちくま新書、筑摩書房、2020年2月）に依頼原稿として寄稿した。

近代的学知と宗教知研究の一環として、雑誌『福音宣教』に短期連載第1回として「よみがえるティヤール・ド・シャルダン 旅人の生涯とその時代」を寄稿した（2020年3月号）。

（4）2020年度

昨年度からの継続事項として、20世紀のカトリシズムにおいてキリスト教古典の発掘と再解釈を教団宗教の信仰と近代的学知の相克と再生の文脈に展開した Ressourcement Theology の潮流について、活動の概観を得る調査を行った。オリエンタリズム研究所刊の雑誌『福音宣教』2020年5月号・6月号に短期連載「よみがえるティヤール・ド・シャルダン」を寄稿し、近代的学知と当時の規準での環境正義の具現化に携わった宗教者・研究者らの精神的支柱となった古生物学者・イエズス会司祭、ピエール・ティヤール・ド・シャルダン（1881-1955）の事績とそのカトリック教会内面的理解の変容、現在の環境正義問題に照らしての再評価の方途を論じた。

2020年度は本来の研究計画上の最終年度だったが、予想外の事態が生じた。パンデミックである。海外渡航が不可能になり、非常勤講師としての各勤務先でのオンライン授業対応のため、大幅に研究計画を縮小することを余儀なくされた。最大の案件として、白水社から邦訳を刊行する予定になっていたエドワード・J・ワッツ著『ヒュパティア 後期ローマ帝国の女性知識人』（原著：Edward J. Watts, *Hypatia: the Life and Legend of an Ancient Philosopher*, Oxford, Oxford University Press, 2015）の訳稿を完成させ、刊行に向けての作業に取り組んだ。

「生きられた古代宗教」関連の業績としては、イェルク・リュブケの同志社大学での講演録（2019年9月）にもとづく論考「都市的宗教 - 歴史的視座から見る宗教と都市 - 」を同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）の依頼により翻訳した。翻訳は同センター紀要『一神教学際研究（JISMOR）』に掲載された。

古典受容史関係の業績としては、まず、日本宗教学会第79回学術大会（駒澤大学、9月、オンライン）「日本語近現代詩歌における西洋古代宗教とキリスト教の受容史」で西脇順三郎作品の古代ギリシア・ローマ神話表象とキリスト教古典表象について報告を行った。また、『ユリイカ』編集部（青土社）の依頼を受けて論考「修辞と予型、ほんとうの物語 古代末期地中海世界における偽書的思考」を同誌2020年12月号「総特集・偽書の世界」に寄稿した。古代末期における歴史的権威の根拠としての古物愛好的思考や逸話の生成と予型論的思考の論理を概観し、ラテン語キリスト教著作家らによるオウィディウスとウェルギリウスの継受と再解釈の事例とコンスタンティヌス伝説の形成を軸にその実態を論じた。

パンデミックは年度内に解決しなかった。当初予定していた在外文献調査が年度内に実施できなかったため、海外渡航の再開を期して2021年度に研究期間を延長した。

（5）2021年度・2022年度

2021年度前半は、エドワード・J・ワッツ著『ヒュパティア 後期ローマ帝国の女性知識人』の校正作業と解説執筆に専念し、同書を白水社から2021年11月に上梓することができた。

『ヒュパティア』は、ローマ帝国の宗教と知的状況の転換期となった4世紀末から5世紀初頭のアレクサンドリアで活動した新プラトン主義者・数学者ヒュパティアの事績とその歴史的意義をジェンダー史的な観点を加えて周辺の諸史料から解明しつつ、中世以降、非業の死をとげた女性知識人として各時代の文脈において伝説化されたヒュパティア像の形成を論じる書物である。古代末期地中海世界の宗教史と新プラトン主義における「生きられた宗教」の実態を伝える点でも、日本語世界においては類書がなかった。「訳者あとがき」では、古代末期地中海世界における新プラトン主義とジェンダー研究の見取り図と現在の研究状況を解説として提示した。

アウトリーチ活動として、訳者による同書の紹介をオンラインブックトーク「ヒュパティアの

虚像と実像」(本屋 B&B・白水社共催、聞き手：橋迫瑞穂、2022年1月)とヒロ・ヒライ主催「BHチャンネル」のオンラインブックトーク「古代ローマの女性知識人ヒュパティア！中西恭子さん登場！」(2021年12月)と「ヒュパティアの秘密！中西恭子さん登場！」(2022年2月)で行ったほか、翻訳記と文献紹介を白百合女子大学キリスト教文化研究所所報『クロナカ』47号(2022年6月)と『ジェンダー史学』18号(2022年10月)に依頼原稿として寄稿した。

日本宗教学会第80回学術大会(2021年9月、関西大学、オンライン)では、「西洋古代末期の宗教表象研究における「生きられた宗教」と感情史」と題して報告を行い、古代末期研究における「生きられた宗教」理論とアクター・ネットワーク理論と「感情史」の適用可能性を論じた。

また、キリスト教文化事典編集委員会編『キリスト教文化事典』(丸善出版、2022年8月)の項目「教父文学」「中世のキリスト教詩」「近現代詩歌とキリスト教」「讃美歌の翻訳と新体詩」を執筆した。音楽の実演にかかわる読者も想定した上で、古代キリスト教文献の枢要をなす「教父文献」と中世盛期に至る「キリスト教詩史」の射程を理解する手がかりを提示し、近現代日本における讃美歌・聖歌翻訳史と並走する新体詩以来の日本語詩歌におけるキリスト教表象の受容史の射程にかんする概説を行った。

2021年度内にパンデミック終結の兆しがみられなかったため、2022年度を本プロジェクトの最終期間としてさらに1年研究期間を延長した。2022年3月以来、ロシアのウクライナ侵攻に伴う世界情勢の変化とともに海外渡航費が高騰し、本プロジェクトの2022年度研究費残額では海外渡航が不可能になった。このため、2022年度は古代末期地中海世界宗教史研究の射程をめぐる現況を主に口頭発表・講演を通して提示した。

まず、4月には古楽演奏団体プロジェクト・ムジカ・メンスラビリス公演「アレゴリー- Allegoria ~中世後期の音楽に描かれたギリシャ神話~」事前対談で中世後期におけるオウィディウスの継受についてコメントを行った(菅沼起一との対談、4月13日、オンライン)。7月には科学研究費助成事業基盤研究B「中世・近世のイスラム圏と西欧における「魔術的知」の交流史」(魔術研、研究代表者：村瀬天出夫、22H00610)の招聘を受け、講演「古代ギリシアの神働術」を行い(7月30日、オンライン)、古代の錬金術・魔術に言及した上で古代末期の新プラトン主義者による宗教史・儀礼史の回顧と教団宗教外の霊性実践としての神働術の系譜を紹介した。方法論懇話会シンポジウム「宗教=歴史実践をひらく」での報告「古代末期地中海世界における宗教史の回顧」(9月7日、オンライン)と2022年度日本基督教会関東支部会シンポジウム「キリスト教とダイバーシティ(ジェンダーの観点から)」での報告「「生きられた宗教」とジェンダー 古代末期の事例を読む」(2023年3月22日、桜美林大学、オンライン)でも、初期キリスト教の規範形成言説に色濃いジェンダー的偏見を現代における古典の濫用と人間の尊厳の剥奪への事例としないために、古代末期の宗教の生活誌の文脈を解明する必要について問題提起を行った。

古典受容史・キリスト教表象受容史の業績としては、慶應義塾大学アート・センターの依頼で西脇順三郎没後40周年記念誌『慶應義塾アート・センターBooklet 30 西脇順三郎没後40周年記念 西脇順三郎 無限の過去、無限の未来』に論考「多面的光源体としての西脇順三郎」を寄稿し、西脇順三郎の古典表象・キリスト教表象の援用に対する意識の変遷について論じた。また、『ユリイカ』編集部の依頼を受けて寄稿した「声なきものの声を織る スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの「小さき人々」」(『特集 スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ』(2022年7月号))と「歴史創作と虚実の星列」(『特集 コペルニクス』(2023年1月号))がある。前者では、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチにおけるケノーシス表象を論じ、後者では魚豊『チ。-地球の運動について-』における「中世的なもの」のイマジネールに託された知と信仰の相克を論じた。

(6) 今後の展望

このプロジェクトでは、宗教表象やジェンダー表象も含む西洋古典受容史・初期キリスト教表象受容史のなかのアダプテーションの着想源を明らかにし、キリスト教的中世を経てルネサンスへ至る自然観・宇宙観にまつわる「知の歴史」を描くために、古代末期地中海世界で書かれた宗教史像と宗教表象観の実像を明らかにする試みが必要とされているという大きな手応えを主に依頼原稿の執筆や招待講演を通して得ることができた。また、受容史の視角は

古代末期地中海世界における「過去の宗教」の叙述と受容の歴史を書くことにかんしては、新プラトン主義の宗教観とキリスト教系歴史叙述の比較における宗教表象への関心の変容や、古典受容史の重要性という主題の存在そのものを可能な限り周知することで研究期間が終わってしまい、単著化にまで至らなかった。当初の計画が壮大すぎたともいえる。大きな反省点である。

継続プロジェクトとして、「古代末期地中海世界の教養文化における宗教像の記録と宗教史の形成 その展開と受容史」(基盤研究C、22K00093)を開始した。ここでは、本プロジェクトで十分に着手できなかった以下の課題群の研究を進めたいと考えている。

(1) ユリアヌスの著作群をはじめとする新プラトン主義者の宗教論の翻訳・紹介を行う。

(2) 古代末期の新プラトン主義者およびアリストテレス注解者の宗教観と宗教実践への関心の実態を、特に在来の多神教祭儀・ダイモン信仰と神働術のほか、宇宙観・自然観・星辰信仰に着眼して明らかにする。その前史としてのヘレニズム期からローマ帝政初期にかけての宗教論における宗教民俗誌叙述や在来の諸宗教に関する思考の系譜を明らかにし、単著化に向けて執筆を行う。可能であればゲミストス・プレトンやマルシリオ・フィチーノら、ルネサンス期における古代末期地中海世界の新プラトン主義者の宗教論の継受の実態と接続して論じる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 21件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 30 |
| 2. 論文標題 「多面的光源体としての西脇順三郎」 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 『没後40年 西脇順三郎 無限の過去、無限の未来』（慶應義塾大学アート・センター Booklet 30） | 6. 最初と最後の頁 116-132 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 55-1 |
| 2. 論文標題 「歴史創作と虚実の星列」 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 『ユリイカ』（2023年1月号「特集 コペルニクス 『天球の回転について』から『チ。 - 地球の運動について - 』へ」） | 6. 最初と最後の頁 290-300 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 「新刊紹介 エドワード・J・ワッツ著、中西恭子訳『ヒュパティア - 後期ローマ帝国の女性知識人 - 』」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『ジェンダー史学』 | 6. 最初と最後の頁 106-107 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 47 |
| 2. 論文標題 「エドワード・J・ワッツ著、中西恭子訳『ヒュパティア 後期ローマ帝国の女性知識人』（白水社、2021年）：紹介と翻訳記」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『Chronica= クロニカ：白百合女子大学キリスト教文化研究所所報』 | 6. 最初と最後の頁 5-8 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 54-9 |
| 2. 論文標題 「声なきものの声を織る スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの「小さき人々」」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『ユリイカ』（2022年7月号「特集 スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ 『戦争は女の顔をしていない』 『チェルノブイリの祈り』 『セカンドハンドの時代』 …耳の作家、声による文学」） | 6. 最初と最後の頁 176-187 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 95巻別冊 |
| 2. 論文標題 「西洋古代末期の宗教表象研究における「生きられた宗教」と感情史」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『宗教研究』（第80回学術大会紀要特集） | 6. 最初と最後の頁 143-144 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 54-3 |
| 2. 論文標題 「恋と革命と生命の輝き 瀬戸内寂聴のホーリズム」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『ユリイカ』（2022年3月臨時増刊号「総特集 瀬戸内寂聴：1922-2021 庵主の物語」） | 6. 最初と最後の頁 130-142 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 イェルク・リュブケ（中西恭子訳） | 4. 巻 16 |
| 2. 論文標題 「都市的宗教 - 歴史的視座から見る宗教と都市 - 」 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 『一神教学際研究(JISMOR)』 | 6. 最初と最後の頁 53-74 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 第94巻別冊 |
| 2. 論文標題 「日本語近現代詩歌における西洋古代宗教とキリスト教の受容史」 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 『宗教研究』（第79回学術大会紀要特集） | 6. 最初と最後の頁 98-99 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 2020年3月号 |
| 2. 論文標題 「よみがえるテイヤール・ド・シャルダン（上） 旅人の生涯とその時代」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『福音宣教』 | 6. 最初と最後の頁 16-28 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 2020年5月号 |
| 2. 論文標題 「よみがえるテイヤール・ド・シャルダン（下の1） 科学と信仰の和解」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『福音宣教』 | 6. 最初と最後の頁 23-29 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 2020年6月号 |
| 2. 論文標題 「よみがえるテイヤール・ド・シャルダン（下の2） 救済史としての未来史」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『福音宣教』 | 6. 最初と最後の頁 23-29 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 52-12 |
| 2. 論文標題 「優しさとさびしさと 別役実の詩と詩学」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『ユリイカ』（2020年10月臨時増刊号 総特集 別役実の世界：1937-2020） | 6. 最初と最後の頁 133-148 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 52-15 |
| 2. 論文標題 「修辞と予型、ほんとうの物語 古代末期地中海世界における偽書の思考」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『ユリイカ』（2020年12月号「総特集・偽書の世界」） | 6. 最初と最後の頁 252-260 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 33 |
| 2. 論文標題 「ローマ帝国の「キリスト教化」とユダヤ教：コンスタンティヌス朝からテオドシウス朝まで（シンポジウム 古代後期のユダヤ教研究の諸相）」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『ユダヤ・イスラエル研究』 | 6. 最初と最後の頁 26-37 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 51-5 |
| 2. 論文標題 「日本のエリアーデ 梅原猛の思想と現世」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『ユリイカ』（2019年4月増刊号「総特集・梅原猛」） | 6. 最初と最後の頁 164-187 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 (2018年) |
| 2. 論文標題 「宗教学から見た古代ローマ宗教」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 極東証券寄付講座慶應義塾大学文学部 日吉設置総合教育科目2018「地中海の魅力」 | 6. 最初と最後の頁 55-62 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 Kyoko Nakanishi | 4. 巻 93 (別冊) |
| 2. 論文標題 「Making of the Concept of “Paganism” in the Later Roman Empire」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『宗教研究』(第78回学術大会紀要特集) | 6. 最初と最後の頁 30-31 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 50-6 |
| 2. 論文標題 「アーシュラ・K・ル=グウィンと文藝共和国の夢 「西のはての年代記」三部作と『ラウィーニア』の場合」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『ユリイカ』(2018年5月号「総特集 アーシュラ・K・ル=グウィンの世界」) | 6. 最初と最後の頁 201-209 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 中西恭子ほか(共著:項目解説) | 4. 巻 61-6 |
| 2. 論文標題 「『月に吠えらんねえ』登場人物紹介」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『現代詩手帖』(特集・『月に吠えらんねえ』の世界) | 6. 最初と最後の頁 75-93 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 中西恭子 | 4. 巻 92巻別冊 |
| 2. 論文標題 「古代末期の新プラトン主義思想における宗教表象と宗教史の回顧」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『宗教研究』（第77回学術大会紀要特集） | 6. 最初と最後の頁 224 - 225 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 なかにしけふこ | 4. 巻 61-10 |
| 2. 論文標題 「箱庭を抜う」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『現代詩手帖』（小特集・『月吠』番外編） | 6. 最初と最後の頁 100-16 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計21件（うち招待講演 16件 / うち国際学会 1件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「「生きられた宗教」とジェンダー 古代末期の事例を読む」 |
| 3. 学会等名 日本基督教学会関東支部会シンポジウム「キリスト教とダイバーシティ（ジェンダーの観点から）」（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「「生きられた宗教」としての帝政後期ローマの信仰世界」 |
| 3. 学会等名 白百合女子大学キリスト教文化研究所研究プロジェクト「愛と知識」2022年度第2回研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「古代末期の新プラトン主義者と宗教実践論をめぐる思索」 |
| 3. 学会等名 科学研究費助成事業基盤研究A「生きられた古代宗教の視点による古代ユダヤ変革期の東地中海の総合的宗教史構築」研究会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「古代末期地中海世界における宗教史の回顧」 |
| 3. 学会等名 方法論懇話会シンポジウム「宗教 = 歴史実践をひらく」（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「古代ギリシアの神働術」 |
| 3. 学会等名 科研費研究助成事業基盤研究B「中世・近世のイスラム圏と西欧における「魔術的知」の交流史」（魔術研、22H00610）（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「プロジェクト・ムジカ・メンスラピリス公演「アレゴリー-Allegoria 中世後期の音楽に描かれたギリシャ神話」事前対談」（菅沼起一・中西恭子） |
| 3. 学会等名 プロジェクト・ムジカ・メンスラピリス（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「【対談ラジオ】ヒュパティアの秘密！ 中西恭子さん登場！」（聞き手・ヒロ・ヒライ） |
| 3. 学会等名 BHチャンネル（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「ヒュパティアの虚像と実像 エドワード・J・ワッツ『ヒュパティア 後期ローマ帝国の女性知識人』（白水社、2021年）日本語訳刊行に寄せて」（聞き手・橋迫瑞穂） |
| 3. 学会等名 本屋B&B・白水社（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「【対談】古代ローマの女性知識人ヒュパティア！中西恭子さん登場！」（聞き手・ヒロ・ヒライ） |
| 3. 学会等名 BHチャンネル（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「西洋古代末期の宗教表象研究における「生きられた宗教」と感情史」 |
| 3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「日本語近現代詩歌における西洋古代宗教とキリスト教の受容史」 |
| 3. 学会等名 日本宗教学会第79回学術大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「日本語近現代詩における世界文学としての西洋古典受容」 |
| 3. 学会等名 ワークショップ「日本における西洋古典受容」(招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Kyoko Nakanishi |
| 2. 発表標題 「Making of the Concept of “Paganism” in the Later Roman Empire」 |
| 3. 学会等名 日本宗教学会第一部会パネル(招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Kyoko Nakanishi |
| 2. 発表標題 「Short Comments on Lived Ancient Religion Theory」 |
| 3. 学会等名 科学研究費研究助成金基盤研究A(海外学術調査)「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴグ資料に基づく一神教の宗教史再構築」シンポジウム「生きられた古代宗教」(Lived Ancient Religion)(招待講演)(国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「古代末期の宗教的实践知としての修徳思想 キリスト教と女性の場合」 |
| 3. 学会等名 科学研究費研究助成金基盤研究A(海外学術調査)「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴーク資料に基づく一神教の宗教史再構築」シンポジウム「宗教的实践知の獲得・伝授と教育」 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「異教的一神教とは何か」 |
| 3. 学会等名 第2回ギリシア・アラブ・ラテン哲学会(招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「ローマ帝国の『キリスト教化』とユダヤ教」 |
| 3. 学会等名 日本ユダヤ学会シンポジウム(招待講演) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「古代末期の新プラトン主義思想における宗教表象と宗教史の回顧」 |
| 3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「宗教学からみた古代ギリシア・ローマ神話 その継承と伝承をめぐって」 |
| 3. 学会等名 慶應義塾大学文学部連続講義「地中海の魅力」(極東証券寄付講座)(招待講演) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「古代末期における『神話』の回顧と一神教文化」 |
| 3. 学会等名 CISMOR研究会「ユダヤ教とその周辺」(招待講演) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 中西恭子 |
| 2. 発表標題 「『古代末期』の教会で『歌った』のは誰か？」 |
| 3. 学会等名 カウンターテナー研究会(招待講演) |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計5件

| | |
|---------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 キリスト教文化事典編集委員会編 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 丸善出版 | 5. 総ページ数 790 |
| 3. 書名 『キリスト教文化事典』 | |

| | |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 エドワード・J・ワッツ (中西恭子訳) | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 白水社 | 5. 総ページ数 276 |
| 3. 書名 『ヒュパティア 後期ローマ帝国の女性知識人』 | |

| | |
|-------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 勝又悦子・柴田大輔・志田雅宏・高井啓介編 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 リトン | 5. 総ページ数 423 |
| 3. 書名 『一神教世界のなかのユダヤ教 市川裕先生献呈論文集』 | |

| | |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 筑摩書房 | 5. 総ページ数 267 |
| 3. 書名 『世界哲学史 II 古代2 世界哲学の成立と展開』 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 ヒロ・ヒライ (編) | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 工作舎 | 5. 総ページ数 277 |
| 3. 書名 『ルネサンス・バロックのブックガイド 印刷革命から魔術・錬金術までの知のコスモス』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|